

音楽の「表現」における技能を養う授業づくり

学籍番号 209349

氏名 瓜生 遥貴

主指導教員 澤田 和夫

1. 研究の背景と目的

筆者はこれまでに受けてきた音楽の授業において、子どもたちに自ら表現するための技能を習得させるのではなく、教師の主観や価値観で子どもたちに演奏のための技術のみを教えてしまっている場面を目にすることが多々あった。しかし、教師が「こんな風に演奏して（歌って）ほしい」という指導ばかりを行えば子どもたちが自らこのように演奏したという思いや意図をもてず、本来の表現技能が習得できないのではないかと考える。先に改訂された学習指導要領（平成 29 年告示）においては、生きて働く知識・技能の習得など、新しい時代に求められる資質・能力の育成を目指して「主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）」の視点からの学習過程の改善が求められている。

本研究の目的は、子どもたちが思いや意図をもって自ら表現していく場を授業の中に設定し、子どもたちが自ら技能を習得する指導について考察することにある。現在、求められる授業を実現するためには、「演奏させることに重点を置く」のではなく「子どもたち自身がしっかりとした思いや意図をもって表現するための技能の習得」に重点を置き、子どもたち自身が学びの中心となる授業づくりが必要であると考えます。

2. 研究の方法

今回は、高等学校1年生音楽 I において、「見上げてごらん夜の星を」、歌劇アイダより「勝利の行進」、「野ばら」について授業分析を行う。

研究の方法として、まず「表現」「技能」という言葉について、辞書や教育書などから、意味の規定をする。さらに、学習指導要領の改訂から「表現」「技能」についての変遷を調べ、授業分析の視点を設定し、授業分析を行う。分析に当たっては、生徒が思いや意図をもって自ら音楽を表現している場面を抽出する。抽出基準は、辞書や教育書、学習指導要領からの「表現」「技能」の定義に沿うものとする。次に、設定した視点に沿って、各場面を子どもの具体的な姿から分析し、分析結果をまとめる。最後に、分析結果を基に結論を出し、考察を述べる。

3. 研究の概要と成果

3.1 1年目の取り組み

1年目の取り組みでは、生徒自身が思いや意図をもち、それを表現させるために、単元名を『旋律の動きから曲想を意識して「見上げてごらん夜の星を」を歌おう』に設定した。「見上げてごらん夜の星を」の旋律や歌詞からどのようなイメージをもったのか、そのイメージを基に、表現を工夫していき、二声のアンサンブルを発表し、それを生徒同士で聴きあい、イメージしたものを表現できていたかの確認をするという授業実践を試みた。

3.2 2年目前期の取り組み

2年目前期ではオペラ、アイダから「勝利の行進」を取り上げた。生徒がより具体的なイメージをつかむために、「凱旋する兵士を称える民衆」について生徒同士が共感・交流しながら、さらに音楽の表現方法についても考えていく授業を行った。また、ワークシートに生徒が考えたことを記入し、生徒自身の考えを可視化できるように工夫した。

3.3 2年目後期の取り組み

後期では、シューベルトとヴェルナーの「野ばら」を取り上げた。同じ詩に対して旋律が異なる2曲から、それぞれの作曲者の思いを感じ取り、それぞれのイメージをもちながら表現することを目指した。生徒自身のイメージを表現したものを録音し、それを聴きながら課題を見つけ、ワークシートに記述する活動を繰り返し行うことで、どのように生徒が表現を工夫していったのかを可視化できるようにした。

3.4 実習の成果

実習の成果として、音楽の「表現」における技能を養う授業づくりには、曲に対する自己のイメージを他者のイメージと共感・交流したり、音楽を形づくっている要素の働き方などを試行錯誤したりしながらイメージを深めていき、どのように歌唱表現をしていくかを考え、それをワークシートに記入したり、自身の歌唱を録画・録音したりすることによって、可視化していくことでさらに深まった表現ができるようになるということ、またその過程の中で、自身の表現を振り返り、改善していくことで技能を養うことができるということが分かった。その中で、曲に対するイメージをもつ活動において、子どもたちの今までの経験や身近なテーマからイメージを引き出し、曲と関連付けることでより深まったイメージをもつことができ、表現を工夫するための手がかりになるのではないかと考える。

4. 今後の課題

今後の課題として、このような授業を実践するには授業時間を多く要してしまうということが挙げられる。子どもたちは、自身のイメージを音楽を通して表現する機会が今までにあまりなかったという声を多く耳にし、実際に音楽で表現することや人前で歌う事に対して、抵抗感がある子どもたちも見られた。子どもたちの経験や身近なテーマからイメージを引き出すには、普段から子どもたちを理解するとともに信頼関係を築き、授業を行うことが大切であると考えられる。